

短編戯曲

「足踏み」

作 鈴木 アツト

劇団印象-indian elephant-

上演時間 約5分

作 鈴木 アツト

登場人物

- 司馬
- 阿相

註 本作品の無断上演を禁じます。上演を「希望の場合は、

info@innocence 宛にお問い合わせください。

大混雑の中、隣り合って立っている他人同士の阿相と司馬。電車は大きく揺られながら、進んでいく。ふいに大きく車内が揺れ、阿相、司馬の足を踏んでしまう。

司馬「痛っ」

阿相「あ、すみません」

司馬「いえ、大丈夫です」

阿相「すみません」

司馬「いえ」

電車は変わらず進んでいる。そして、またふいに大きく車内が揺れる。

司馬「痛っ」

阿相「あっ」

司馬「大丈夫ですから」

阿相「本当にすみません。何度も」

司馬「気にしないでください」

電車は変わらず進んでいる。そして、またふいに大きく車内が揺れる。

司馬「痛っ」

阿相「あっ」

司馬「……」

阿相「大丈夫ですか？」

司馬「大丈夫です」

阿相「本当にすみません。何度も何度も」

司馬「…」

阿相「わざとじゃないんです。こんなに揺れるから」

司馬「大丈夫です」

電車は変わらず進んでいく。今度は、司馬が阿相の足を踏んでしまう。

阿相「痛っ」

司馬「あ、すみません」

阿相「いえ、大丈夫です」

司馬「すみません」

阿相「いえ」

電車は変わらず進んでいく。司馬、もう一度、阿相の足を踏んでしまう。

阿相「痛っ」

司馬「あっ」

阿相「…」

司馬「大丈夫ですか？」

阿相「わざとでしょっ？」

司馬「え？」

阿相「あんたわざと足踏んだでしょっ？」

司馬「何言ってるんですか？」

阿相「だっておかしくないですか？2回も連続で」

司馬「あんただってさっき私の足を踏んだじゃないですか？3回も

連続で「

阿相「その仕返しに踏んだんですか！」

司馬「違いますよ。偶然ですよ。あんたこそわざとだったでしょう。」

阿相「なんで僕がわざと踏む必要があるんですか！」

司馬「だったら少なくとも後一回は私が偶然足踏んだとしても許されるはずでしょ？」

阿相「やっぱりわざとだったんだ」

司馬「あんたこそわざとだったんだ」

阿相「……」

司馬「……」

阿相「わざとじゃないならなんでそんな言い方するんですか？」

司馬「どんな言い方ですか？」

阿相「後一回は踏んでも許されるって」

司馬「あんたがわざと踏んできた疑いがあるからです。だっておかしいでしょ？これだけ混んでて三回連続同じ人の足に向かってバランスくずすなんて」

阿相「これだけ混んでいるからこそです」

司馬「三回連続も？」

阿相「わかりました。あなたのも偶然だって認めますよ」

電車は麥わらず進んでいく。そして、またふいに大きく車内が揺れる。阿相と司馬、バランスを崩しそうになりながら、耐える。二人、なぜか目が合う。持ちこたえて、ほとと一息ついたところ、突然、車内がガクンと揺れて、司馬はゆっくりと阿相の足を踏みつける。

司馬「あっ」

阿相「え？」

間。

阿相「どついついどですか？」

司馬「すみません。でもおわかりのとおり、今は明らかにわざとじゃないんです。油断したっていうか」

阿相「すぐくゆつくり踏みつけましたよね？」

司馬「でもわざとじゃないんです」

阿相がゆつくりと明らかに故意に司馬の足を踏みつける。

司馬「え？」

阿相、もう一度、司馬の足を踏みつける。

5

司馬「え？え？」

阿相「もういいですよ」

司馬「はい。」

阿相「あんたがわざとかわざとじゃないかはどういいです。俺がわざと踏まれたと思った分はわざと踏み返すことにしましたから」

阿相、そう言ってもう一度、司馬の足を踏みつける。

司馬「あんた最初からわざとだったんだろ？」

阿相「あんたこそ最初からわざとだったんだろ？」

司馬「俺は一回もわざと踏んでねえよ」

と言いながら、阿相の足を踏みつける。

阿相「今のはわざとじゃねえのかよ」

と言いながら、司馬の足を踏みつける。

司馬「何するんだよ!」

阿相「何するんだよ!」

二人、永遠に踏み合い続ける。暗転。

終わり。